第 68 回歴史探訪の会『宇治の世界遺産を巡る』

実施日：平成 31 年 4 月 11 日（木曜日）
場所：　京都府宇治市
案内人：澤田謙治

コース：京阪・宇治駅～宇治上神社～宇治神社～恵心院～興聖寺～中の島公園（昼食）～あじろぎの道～平等院～香りの道～宇治橋～京阪・宇治駅

前日からの雨は朝にはあがったが、最高気温 14 度で北風が強く肌寒い一日でした。13 名の方に参加頂き「宇治観光ボランティアガイドの会」のガイドさん 2 人の案内で宇治川周辺の世界遺産を含む寺社、史跡を歩きました。

宇治は京都と奈良、及び東国を結ぶ主要道が通過し、又、急流の宇治川に宇治橋が架けられていた事により、古くから交通の要衝として開けてきました。平安時代には摂関政治の成立にともない藤原氏の荘園、別荘地となりました。その遺構の一つである平等院鳳凰堂は藤原時代を代表する建築物として今も全容をとどめています。
文学が隆盛した時代には、源氏物語の宇治十帖をはじめ、宇治を舞台にした数々の文学、詩歌も生まれました。

貴族社会が次第に衰え、武家社会が勃興した時代には、宇治川先陣争いで有名な宇治川の合戦をはじめとした数多くの戦いがこの地で起こりました。室町時代以降、宇治において重要な役割を果たしてきた茶業は、宇治茶の名声とともに繁栄し、江戸時代においては茶の総支配が代官を兼ね、幕府へ献上する茶は茶壷道中と称し、行列を整え江戸へ向かいました。沿道の住民は大名行列に接すると同様にこれを送迎したといいます。
（以上宇治市ホームページより）

【宇治上神社】＜世界文化遺産＞

ご祭神は 3 柱で、左殿には菟道稚郎子命（うじのわきいらつこのみこと） 日本書紀では「菟道稚郎子」、古事記では「宇遅之和紀郎子」と表記される。応神天皇の皇子で、天皇に寵愛され皇太子に立てられたものの、異母兄の大鷦鷯尊（のちの仁徳天皇）に皇位を譲るべく自殺したという話しが日本書紀には残されている。
中殿は応神天皇（第 15 代天皇）、菟道稚郎子命の父。右殿は仁徳天皇（第 16 代天皇）、菟道稚郎子命の異母兄。

寝殿造の拝殿

流造の本殿（現存する日本最古の神社建築）

宇治市などによる年輪年代測定調査では、本殿は流造で平安後期、1060 年頃のものとされて、現存する最古の神社建築であることが裏付けられた。拝殿は寝殿造で、鎌倉時代前期に造られたとされ、本殿と共に国宝に指定されている。

境内には桐原水（きりはらみず）と呼ばれる湧き水がある。宇治には茶の湯に欠かせない水に「宇治七名水」が定められ、その一つが「桐原水」である。現在残っているのは「桐原水」のみで、他の6つは枯れてしまった。生水では飲用に適さないが、煮沸してお茶をいれる為に地元の人達が朝から汲みに来るそうです。

桐原水

宇治上神社のすぐ近くには宇治神社があり、宇治上神社とは二社一体の存在であった。明治以前、宇治上神社は「上社」・「本宮」、宇治神社は「下社」・「若宮」と呼ばれたほか、両神社を合わせて「宇治離宮明神（八幡宮）」と呼ばれた。宇治上神社の境内は『山城国風土記』にある菟道稚郎子の離宮「桐原日桁宮」の旧跡であると伝え、両社旧称の「離宮明神」もそれに因むと伝わる。明治に入り、両神社は分離した。

【宇治神社】

宇治上神社に隣接しており、ご祭神は宇治上神社のご祭神の一つで菟道稚郎子命（うじのわきいらつこのみこと） で、本殿には、菟道稚郎子像と伝わる神像（国の重要文化財）が祀られている。

ご祭神が、この地に住まいを定められて、河内の国より向かわれる途中、道に迷われ難渋している時に、一羽のうさぎが現れ、ご祭神を振り返り振り返り先導申し上げたという古伝により「みかえり兎」と言われ、この後、道徳に叶った正しい人生の道を歩むよう教え諭しているもので、神様のお使いとされております。この神社の手水舎にはうさぎがモチーフされています。又、菟道という字を「うぢ」と読み、内なる場所の意味を持ち、後に「宇治（うじ）」という字になったとも言われています。

又、菟道稚郎子命は日本で最初に感じを学んだ人と伝わっており、この為、学問の神様としても知られています。

宇治神社本殿

うさぎをモチーフにした手水

【恵心院（えしんいん）】

真言宗智山派の寺院で、空海（弘法大師）によって開かれ、龍泉寺と名付けられた。本尊は十一面観音像。「往生要集」の著者として名高い恵心僧都源信（えしんそうずげんしん）によって再興され、恵心院と称するようになった。源信は、宇治川に入水した源氏物語・宇治十帖のヒロイン浮舟を助けた横川のモデルとも云われている。境内にはたくさんの花が植えられており、「花の寺」としても知られています。

恵心院への参道

恵心院本堂

葉の真ん中あたりに花が咲くという珍しい花
「花筏（はないかだ）」（別名：嫁の涙）

葉のほぼ中央（矢印の先辺り）に花が咲く

【興聖寺（こうしょうじ）】

宋から帰国した道元が 1233 年頃に深草に興聖寺を開創し、僧侶の教育、育成を目指す修行場として全国最初に開かれた「曹洞宗初開道場」で、その後荒廃したが、淀城主であった永井尚政が万安英種（ばんなんえいじゅ）を招き宇治の地に再興した。山門の屋根の左右に配されているのは「摩伽羅（まから）」と呼ばれる想像上の生物（ワニと魚の合体物）で水生動物は火事から建物を守ると信じられていた。

興聖寺の山門

法堂（はっとう）と境内

法堂には伏見城の遺構が使用されており血痕の残った天井（チョークで白く囲まれた箇所）を見る事が出来る

僧堂（修行僧の生活の基となる場）の内部。座禅の際、曹洞宗では壁に向かって座禅をくみ、臨済宗では壁を背にして座禅をくむ。

興聖寺に通じる参道は「琴坂」と呼ばれていて、桜と紅葉で有名。 琴坂の参道沿いに流れる湧き水は、本堂脇の貯水槽に一旦貯められた朝日山の山水が流れており、その水の流れがあたかも琴の音色に聞こえ、長い参道が琴の形状に似ていることから琴坂と呼ばれるようになったと言われている。

興聖寺の琴坂

【宇治公園・中の島・宇治川先陣の碑】

宇治川に浮かぶ2つの島、塔の島と橘島にまたがる公園で、橘橋、喜撰橋、中島橋、朝霧橋で 2 つの島と両岸が結ばれている。春には「桜まつり」、秋には「観月茶会」、「茶まつり」が催される。

中の島へ渡る橘橋から宇治川上流を眺める

都への南の出入り口となる宇治では数多くの戦いが行われましたが、平安時代末期の寿永 3 年（1184 年）に源義仲（木曽義仲）軍と源義経軍が宇治川で戦った際に、義経軍の佐々木高綱と梶原影季が宇治川で先陣争いをしたと伝わる。

宇治川での戦いの１年前に入京した源義仲は後白河法皇と皇位継承をめぐって不仲となり、法皇は源頼朝に義仲追討の院宣を下した。頼朝は範頼、義経に義仲追討を命じ、範頼は瀬田から、義経は宇治から都へと攻め寄せた。その際、高綱は生食（いけづき）、景季は磨墨（するすみ）と、それぞれ源頼朝から賜った名馬に乗って一番乗りの功名を立てんと川に乗り入れようとした。

高綱が「馬の腹帯が緩んでいる。絞め給え」と影季に助言し、景季が腹帯を締め直している隙に高綱が先に川に進み入ってしまった。謀られたと知った景季も急いで川に乗り入れ、川中で激しく先陣を争い、結局、高綱が一歩早く対岸に上陸して一番乗りを果たしたと伝えられている。

宇治川先陣の碑

尚、源義仲が都に入るきっかけは治承 4 年（1180 年）に以仁王（後白河法皇の皇子）が発した平家追討の令旨で、以仁王に助力した源頼政が同年宇治で平家軍と戦って敗れている。以仁王は南都興福寺に逃れる途中現在の木津川市付近で平家軍に討たれた。

源頼政の自害した場所（扇之芝）と墓は平等院内にある。

【宇治公園・中の島・十三重石塔】

宇治川の中州である中の島公園（橘島と塔の島）にある十三重構造の石塔で、現存する近世以前の石塔としては最大(15.2 メートル)で、国の重要文化財に指定されている。

僧・叡尊が鎌倉時代後期に宇治橋の大掛かりな修造を手がけ、橋が完成する弘安 9 年（1286 年）に合わせて、宇治川の川中島として橋の南方に人工島を築き、宇治川で漁れる魚の供養と橋の安全を祈り、島に大塔婆を建てたもの。その後、何度か川の氾濫で被害を受け、再建されたが、江戸時代後期の宝暦 6 年（1756 年）の大氾濫で倒れ、川底の泥砂に深く埋もれてしまい長く間再建されずにいた。

現在のものは明治 41 年（1908 年）に再建されたもの。

宇治川を背景に中の島にて

【平等院】＜世界文化遺産＞

京都の南に位置する宇治の地は、『源氏物語』の「宇治十帖」の舞台であり、平安時代初期から貴族の別荘が営まれていた。現在の平等院の地は、9 世紀末頃、光源氏のモデルともいわれる左大臣で嵯峨源氏の源融（みなもとのとおる）が営んだ別荘だったものが宇多天皇に渡り、天皇の孫である源重信を経て長徳4年（998年）、摂政藤原道長の別荘「宇治殿」となった。藤原道長は万寿4年（1027年）に亡くなったが、その子の関白・藤原頼通は永承7年（1052年）、宇治殿を寺院に改めた。これが平等院の始まりである。開山は小野道風（おののみちかぜ/とうふう）の孫である明尊（みょうそん）である。創建時には本堂は、鳳凰堂の北方、宇治川の岸辺近くにあり大日如来を本尊としていた。翌天喜元年（1053年）には、西方極楽浄土をこの世に出現させたかのような阿弥陀堂（現在の鳳凰堂）が建立された。鳳凰堂とその周囲の浄土式庭園は、西方極楽浄土とその教主である阿弥陀如来を観想（特定の対象に心を集中させること）するために造られたとされている。

平等院が創建された平安時代後期には、日本では「末法思想」が広く信じられていた。末法思想とは、釈尊の入滅から2000年目以降は仏法が廃れるという思想であるが、天災が続いたため人々の不安は深まり、終末論的な思想として捉えられるようになり、この不安から逃れるための厭世的な思想として捉えられるようになった。仏教はもともと現世での救済を求めるものだったが、この頃には来世での救済に変わっていった。平等院が創建された永承 7年（1052 年）は、当時の思想ではまさに「末法」の元年に当たっており、当時の貴族は極楽往生を願い、西方極楽浄土の教主とされる阿弥陀如来を本尊とする仏堂を盛んに造営した。そのほとんどはその後の戦乱で焼失したりし

て現存していない。平等院も南北朝の戦いの兵火をはじめ、度重なる災害に見舞われたが、鳳凰堂のみが奇跡的に災害をまぬがれ現在まで存続している。

尚、鳳凰堂の屋根の左右に設けられている鳳凰は左右対称ではなく、頭を下げる角度が少し異なって作られています。左右の鳳凰は雄と雌の 1 対だそうで、どちらが雄、雌かは明らかにされていません。相手よりもより深く頭を下げているのは雄なのか、雌なのか。。。どう思うかはそれぞれのご家庭の事情だとか。。。

鳳翔館（ミュージアム）内には梵鐘、鳳凰（1 対）、雲中供養菩薩 26 体等が展示されています。（館内撮影禁止）

【宇治橋】

宇治川に架けられている宇治橋は 646 年（大化 2 年）に架けられたと伝えられ、『瀬田の唐橋』（滋賀県大津市）と『山崎橋』（現在の京都府乙訓郡大山崎町と八幡市の間に淀川に架けられた橋だが現在はない）とともに“日本三古橋”と伝えられている。現在の橋は 1996 年（平成 8 年）3 月に架け替えられたもので、橋の姿が宇治川の自然や橋周辺の歴史遺産と調和するように、擬宝珠を冠した木製高覧という伝統的な形状を使用している。上流側には張り出した場所を設けてあり、これは橋の守り神である橋姫を祀る、「三の間」である。豊臣秀吉がここから茶の湯を汲ませたという逸話がある。現在でも「茶まつり」が行われる（10 月第一日曜日）際には、ここから水を汲んでいる。平等院と宇治橋の間の平等院表参道は「香りの道」と呼ばれ、宇治茶の老舗店がたくさんあり、歩いていいてもお茶のいい香りがします。

平等院　鳳凰堂を背景にして

写真は田原さん、岸場さんが撮影されたものを使用させて頂きました。